

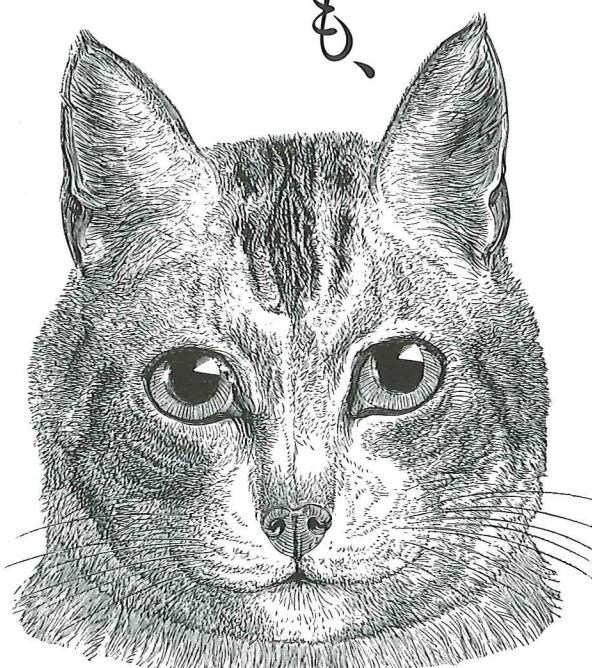
# 神は負けても、 親切は勝つ

岸政彦  
*kishi masahiko*

私は宗教はない。何かの信仰をもつ、といふことがよくわからない。既成の、特定の宗教を信じるということがほんとうにわからなくて、例えばキリスト教徒の方はイスラム教という「別の世界体系」をどう思つているのだろうかと、不思議に思う。もちろん、特定の信仰をもつたたくさんの人々がいて、異なる世界体系としての別の信仰をもつた人々と、これまでなんとかうまくやろうと努力してきたということは知つてている。そういう話ではなく、もっと個人的な、実存的なレベル

で、信仰をもつということがわからない。

ずっと以前、あるキリスト教徒の高齢の社会学者に、信仰をもつということはどうのことか、それは「神が実在している」という信念をもつっているということか、としつこく聞いたら叱られたことがあって、いまでもこの「叱られた」ということに、なんとなく納得がいかない。まだ私も若かつたころの話で、いまならそんなことは聞かないが、とにかく純粹に素朴に興味があつたから尋ねただけで、しかしこの「尋ねる」ということ自体



が、信仰をもつ人にとっては不愉快なのだと、いうことを、このとき学んだ。信じているものを相対化されたら、たしかにそれは不愉快だろう。そして、聞く、尋ねる、質問すると、いうおこない自体が、必然的に人の信念を相対化してしまう働きをもつているとすると、もう私たちには、そうした信念をもつということがどのようなことかを知ることは、原理的にできなくなってしまう。聞くことすらできないのだから。どれだけ上品な聞き方をしたとしても、信仰をもつてることそのもの

についての質問は、「「一体なんでまたそんなもの／信じてるんですか？」という、不羈な**揶揄**と変わりはない。だから私は、いつまでもわからないままだ。

猫を飼っている。子どものころから犬やら猫やら鶏やらインコやら亀やら金魚やら、いつも何がしかの動物がいる家で育つて、そのあと家を出てひとりで一〇年間暮らして、いつも思っていたのは、犬か猫がいないところに寂しいんだ、ということだった。しかし貧乏な一人暮らしでちゃんと世話ができるわけもなく、あきらめてよその猫たちにときどきごはんをあげてそのかわりにちょっと撫でさせてもらう、というだけで我慢していたのだが、結婚してすこし広い家に引越したときに、部落解放研究所で研究员をしていた連れあいから電話がかかってきて、子猫が二匹捨てられているねんけど、どうしよう。いや、ウチのマンションペット禁止やで。そうやなあ。どうしよう。と、しばらくやりとりしたあと、その場で決断して、彼女はその二匹の子猫を、家まで連れて帰った。電車のなかで、部落解放運動のシンボルである荊冠が描かれたダンボール箱のなかから盛大に子猫の鳴き声を響かせながら。

そしてそのあと一八年間、何度か引越をしながら、ずっと家族四人で暮らしてきた。子

どもができなかつた私たちにとつて、「おはぎ」と「きなこ」は、子ども以上の存在だった。去年の一月にきなこは安らかに亡くなつてしまい、いまはおはぎひとりが静かにこの家で暮らしている。これまでどおり、最後まで溺愛しようと思っている。

子どものころ、家のなかに話し相手が誰もいなくて、いちばん仲良くしていたのは犬と猫だった。友だちは何人かいたけど、それほど話が合つたわけでもなく、だからいちばんお互い理解し合えたなと思うのは犬と猫で、それはいまでも変わらない。動物たちと言葉を交わすことができる医師が主人公の『ドリトル先生』シリーズが好きで、その荒唐無稽な物語を何度も何度も読み返していたが、いまから考えると私はすでに犬や猫たちと十分言葉を交わしていた。遊びたい、一緒に寝たい、ひとりで寂しかった、いまは触られたくない、お腹が減った。犬や猫の要求はいつもシンプルだから、言葉を使わなくても私たちはお互いわかり合うことができる。

大学内のある会議で、授業態度の悪い学生のことを「発達障害」よばわりした教員がいた。いま思えば怒鳴りつけるべきだったと思うが、そういう私自身が、他者への暴力的なラベリングから逃れられているわけではない。まず必要なことは、尊重としての距離化だ。他者を理解することを差し控えることは、他者の尊重の第一歩である。簡単に理解できると思わないほうがよいのだ。

しかし、そう思いながらも、やはりどこかで、例えば普通の、世俗的な、身近な言葉をお互いに交わすことで、立場を超えて完全に共感したりすることは無理でも、何らかの「理解」というものがそこに生まれるのではないか、という強い思いもある。

深い共感や共振というものがまったくなくとも、例えば抱き合つたり、頭を撫でたり、散歩しにいつて一緒に走つたり、おいしいごはんをあげたりして、相手を喜ばせることはできる。

理解できる、ということに、根拠はない。

そして、根拠がないのに強く思う、ということがもし信仰なら、これが私の信仰なのだろう。だから、私には神はないが、信仰はある。信仰というか、少なくとも、信じているものがある。私たちは、あまりにも多くのラベルを他者に貼りつけてしまう。

犬や猫は、神でも仏でもない。神仏というものは人間が作り出した概念であって、実在しない。しかし犬や猫は実在している。人間も実在している。そしておそらく、理解という「事態」も、実在している。そこに言葉が介在しても、しなくて、私とあなたの間で何かが達成され、何かの事態が生じる、といふことが、この世界にはある。すべてを理解し、共感し、経験を入れ替えることはできないけど、こういうことがあったんだよと、言葉を交わして、合理的な、世俗的なやり方で、私たちすでに他人と（あるいは犬や猫と）共に生きているのだ。

先日、東京に日帰りで出張して、新幹線で大阪へ帰る途中で、ずっと寝ていたのだが、なんとなく目が覚めてiPhoneを見たら、LINEやFacebookメッセンジャーにくつつか、何か切迫した、緊迫した友人たちの連絡が入っていた。大丈夫？ 無事ですか？ いま新幹線の中ですよね？

人が殺されたらしいよ、大丈夫？

私は目を覚まして、ざっとTwitterで検索すると、どこかの若い男が新幹線の車内で、鉛筆を振り回して、死者が出ていた。Twitterには、そこに居合わせたたくさんの人々が撮った写真や動画が流れてきていた。その前に、東京駅で、もう二時も過ぎて

いて、ちょっととゆっくり車中で食べるものを買おうか、それとも早く乗つて車内でお弁当を買おうか、と迷っていた。私はなんなく、早く帰りたくて、いちばん早い新幹線の切符を買った。

事件が起きたのは、まさに私が迷っていたほうの便だった。たまたまその一本前の便に乗つたのだが、事件が起きた便に乗つていたかも知れなかつた。

痛ましい突然の死、というものがある。それは私たちのすぐ隣にある。死、というものは、同心円状に広がつていて。中心に、まさにその死者がいる。その死を引き起こした者がいる。その場に居合わせた者たちがいる。その場に居合わせたかも知れなかつた者たちがいる。その場に居合わせたかも知れなかつた者たちを心配する者たちがいる。そうやって死は、波紋のように、徐々に力を弱めながら、同心円状に広がるのだ。違うところからやつてきたさざ波の輪が、たまたまぶつかることもある。

そうやって私たち生きているのである。

死に意味はあるか。ない、と思う。私たちは死に接して、それに驚き、傷つき、痛みを覚え、その痛切さの真ん中で、心臓を轟くにされ、呼吸の邪魔をされる。眠れない夜が続く。いつまでも癒えることがない。

そこで私たちとは、つい出来合いの物語にすがることがある。安い意味づけをしてしまうのだ。命を何かから「いただいた」と言つたり、「亡くなつてしまつたものは何かの「目的」をもつて亡くなつたのだと言つたりしてしまう。

私が一本早い新幹線に乗つていたことは、単なる偶然であつて、何の意味もない。誰からも何も貰つてはいないし、そのことで何ものかに感謝したりはしていない。そういう意味づけは、たわいもないものではあるが、それについてやはり、生き残つてしまつたという事実そのものがもつ「尊厳」のようなものを、台無しにはしている。

私は、ぎりぎりのところで生き残つたことを考える。私は自分が生きているということと、そのそのものを、いつも考えたいと思う。

あるいは、死というものの痛切さを思う。その死というものの、その残酷さ、痛ましさを、私は一切の意味づけもせずに、そのまま考え続けたいと願う。

私が親しくしていく、そして亡くなつてしまつたすべての人々のことを、いつも考える。天国も地獄も実在しない。そして、少なくとも私にとっては、神も仏も実在しない。だからかれらは、もうどこにもいない。その、「もうどこにもいない」ということを、

考える。

いま沖縄で、沖縄戦の体験者の方々の生活史を聞き取っている。いま四〇人ほど聞いていきたいと思っている。聞いて、文字に起こして、製本して、後世に残したいと願っている。

多くの人々が亡くなつた。しかし同時にこの戦は、多くの人々が生き残つた戦でもある。そしてその生き残つた人々が、子や孫を育て、いまの沖縄をつくってきた。私はその物語を聞いて、書き残したいと思う。だからずっと、自分の母親が目の前で爆弾にあたり、腹から内臓が飛び出しているのを、家族みんなで手で押さえた、という話を聞いていた。

そういう死が、数万、数十万とあった。あまりにもたくさんの死、というものを、私たちは理解することができない。それはもう、わからない、としか言いようがない。しかし同時に、わからうともしない、ということでも、許されることではない。なんとかわかるうとしなければならないのである。私たちには、そのため、何かできることをしなければならない。死者たちによつて、私たちは衝きうごかされる。死について思うことは、死思ふねん。でな、ちゃんと私たちのこと、見てると思ふねん。だから〇〇くん、いつも頑張つ

果たすことのできない約束だが、反故にすることもできない。

あとはもう、ただ考えるしかない。そしてできることをするしかない。

しかし私たちには、少なくとも、猫や、犬や、友だちと会話を交わし、そしてその範囲のなかで、合理的に世俗的に、お互いを理解することができます。少なくとも、そういうことはできて、そしてこの世界のなかにそれは実在するのだ、ということを信じることができる。猫と理解し合える、という事実は、崖からぶら下がつている私たちが、最後につかまることができる枝だ。もう他に、つかまるところはこの世界にはない。それは荒れた夜の海に浮かんだ、たつたひとつの木切れである。もう他に、すぐるものはこの世界にはないのだ。

根拠のない信念が信仰であるとするなら、これが私の信仰である。だから私も、何の宗教も信じていないけど、ひとつは信仰をもつてているということになる。

先日、大学の卒業生たちと飲んでいて、仕

事や恋でうまくいかない男子を、ある女子が慰めていた。私な、神様ってな、おると思うねん。でな、ちゃんと私たちのこと、見てると思ふねん。だから〇〇くん、いつも頑張つ

てるやんか。そういうとこちゃん、見てくれていると思うねん。

私はここにすべてがあると思う。彼女は、神はいる、とは言わなかつた。神がいるかどうか、と聞けば、彼女もない、と答えるだろう。ただ彼女は、いると思う、と言つたのだ。そして、そう言うことで、彼女は本当は、あなたの努力がいつか報われますように、と言つたのである。つまり彼女は、祈つたのだ。彼のために。友だちのために、目前にいる、大学時代からの友人のために、彼女はそういう言葉で、そういう言い方で、彼女なりに、祈つたのである。純粹に、友だちのために、誰も傷つかないような、たわいもない、日常的な、世俗的な言い方で彼女は、祈つたのだ。

カート・ヴォネガット (Kurt Vonnegut) は、「愛は負けても親切は勝つ」と言つた。

「人生の目的は、隣にいる人に親切にしてあげることだ」と言つた。私は「神は負けても親切は勝つ」と思う。だから、猫を撫でること、友だちを思いやることは、そのままこの世界のもつとも大切なものに対する、祈りなのである。

(きし まさひこ・立命館大学大学院  
先端総合学術研究科教授)

著書に『はじめての沖縄』(新曜社)、  
『断片的なものの社会学』(朝日出版社)など